

朝鮮勢と撃破る小西の死に忍びの者は伊賀者百人あり  
 半と分け敵の後ろへ廻り山下に火を放ち焼立ける敵  
 軍洞窟大に騒動し崩れ立つ處に日本勢の聲を立て一  
 度まがらりと押し攻討ち敵兵を悉く江中に追ひめりれば  
 死者者數を知らし行長忠州をも攻落し討取る處の首  
 級と取り持せ浮田秀家の許に遣はしバ數度の忠戦類  
 ひたりと感ぜりける

朝鮮申磁忠州に至り一時忠清道の郡縣の兵来て會せり  
 者八十餘人申磁鳥嶺を保たしと欲せり李鎰が敗軍と  
 聞き膽魂を失ひ忠州へ還り且李鎰邊機等とも召集め俱

忠州に至り又險嶺を棄て守らば号令煩擾をうけしハ  
 くる者必し敗れんを知り又申磁が親き軍官のもれ密  
 に日本勢已に嶺と踰たりとも報けり是乃二十七日  
 壬辰の初段をうけしを申磁忽ち城を跳え出けり軍中擾  
 れさるる申磁が在る所と知らし夜深く潜り客舎に還り  
 明朝に力を軍官が妄言しつて出てしるを斬り  
 都つん敵ハ猶も尚州と立ち離れざるに注進しけり日本  
 勢已に十里一里の内の小在事と知らせりしるに因り申  
 軍兵と率み出て彈琴臺の前から兩水の間に陣と取り其  
 地左右稻田多く水草交雜し馳駈る不自由なり少頃し

日本勢丹月馭と路を分けけり至る勢風雨の如く一路  
 八山は循て東へ出て一路ハ江に沿て下り来る銃砲の響  
 き地は震ひ馬相塵埃天は連て接く申磁為す所と知らぬ  
 馬を鞭うち自敵陣と突んと欲し再度で駈け出ると  
 も入る事を得て還りて江に赴き是非なく水中に没せり  
 死けし諸軍悉く江中へ赴き是非なく水中に飛び入り  
 せしは屍江と蔽ひく流せしう金汝物も乱軍の中へ死  
 せける李鎰ハ東邊の山谷の間より脱れ走り初め都  
 少ては日本勢の盛んなりと聞き李鎰が獨り力よく支へ  
 難きと憂ひ申磁を當代の名將として士卒畏れ服せりと以

大軍と率めて後詰をせしむ兩將勢いと合せたる敵軍  
 と捍る事し有るなりとゆきし小失計も無りし不  
 幸より本道尚水陸の將皆憶病して其海邊に在りてハ  
 左水使節度使朴泓一兵も出さず右水使節度使元均ハ水  
 路稍遠しと雖領する所の舟艦既多しれを衆兵を殘ら  
 し進め出し兵威を輝りて互に持合ひませハ幸より  
 一度勝利を得るつは敵も後を顧るもの慮り有る必  
 遷る不深入りせしむる取沙汰は畏れ風を望む遠  
 く兵と避け一たびも兵と交りて扱敵軍陸に登るに及び  
 て左右兵使左兵馬節度使 右兵馬節度使羊珪曹大坤或ハ遁れ或は役と

かゝるもく小せしうぐ敵軍と鳴くを横行し數百里人無  
 きの地と踏し行き晝夜北とまゝ攻上り一處も支つべ  
 かり其勢を緩くする者無し一日十日たゞびして  
 已る尚州に至るを小西行长等四月十三日渡海釜山落  
 城同二十四日尚州に到る其間の日  
 數十二日なり柳成龍我國の李鎰ハ其地不熟の客將として  
 怯弱を横り斯云ふたゞむ李鎰ハ其地不熟の客將として  
 李下の軍率としてハ無く揮かる合戦にて勢は固く敵は之  
 きやうなく申磁おし忠州一列らざる前李鎰ハ敗軍  
 及び進退擾と失ひ大なる擾り及つて嗚呼痛哉後  
 小聞日本勢尚州よりうぐ時猶し險阻と通るは朝鮮勢  
 の備へ有らむ夏と憚り聞慶縣の南十里に古城あり姑母

と云左道右道慶尚の左 交會の處として西方の山峡東に  
 道右道たゞの如くして中は大河盤り其下は生来の路有るに  
 此を朝鮮より守るの兵有らむ夏と恐れ人として再三規  
 覲守るの兵無きと知て歌舞して過たりと云其後ハ規  
 將李如松此鳥嶺を過り時如此くの險有らむ守る夏  
 知らし申磁ハ謀なり將ありと歎息せしと云蓋申磁  
 ハ輕銳して時名を得たると維籌略ハ長ざる所は非ハ古  
 人の詞は將不知兵以其國與敵と云るを理たり  
 日本諸將於忠州會合附加藤小西口論之事  
 日本加藤主計頭清正後川と臨り其下諸邑と押掠

め鳥嶺と越て忠州より打入りけり然る處より小西の士卒等民  
 屋と乱妨し布木徹等果て牛馬を取付来りしは行く  
 先毎に心の如くかゝりて主計頭清正ハ小西行長に對面  
 て三城一攻入らば倭羅錦滿元滿やうむ加様の類は何の  
 用その立む多し放火せしめ身輕くして押行しよと有  
 りし行長是れ同ト悉く焼捨せやう斯る處は黒田甲斐  
 守長政鍋島加賀守直茂大友豊後侍従義統相良宮内少輔  
 頼貞等以下柳鮮渡海の諸將皆忠州に著陣せし忠州の  
 兵は當りて廣き野あり此處より會合ありと小西の方  
 一云違ふ其翌日諸將彼野に於て會合あり忠州より王

城ハ北道二筋あり東大門口南大門口と云京城は大門ハ  
つ有る中にも  
 東西南北の大門と要路より慶尚道より都へ入る東大  
ハ漢江と渡り東大門又ハ南大門より入ると云  
 門口ハ南大門口より其速き夏十里ある南大門口ハ路  
 程近しと云いとも半塗は大河あり先陣ハ西將圍取りよ  
 して向ふべしとかなり清正進み出て某に於てハ南大門へ  
 向ふとて夏もかなふ云ひけりハ行長腹立て主計頭の  
 一言傍らよ人なきが如しと謂ふべし此儀に於てハ一向  
 叶ふまゝと詞を放つ論じれば清正あざ笑ひて汝天草  
 の一揆とてきと浴む夏能く我勇を借りてと忘れ  
 やと云ふ行長怒つて天草入用とて刀を掛り

を清正我に向つて及と振らむと欲するや既に同土討  
 よ及むんと鍋島加賀守直茂兩人の中を割つて入る  
 斯のふときの口論是名將のせざる處よりて外國に耻と  
 殘れと云物なくん其上多うて兩人付果されるは大岡大  
 義の思召立徒ら事となくん然らば不忠才一かた下と  
 理と碎りて制しけしは兩人も理は服し尤も同意とて和  
 睦し清正南大門へ向ふべきより極るる天草一揆とは  
 去る天正十六年肥後一國と加藤清正小西行長兩人は  
 もれより行長の領分天草郡の地侍共一揆と起し已れ  
 ら城より楯籠り行長率勢六千五百小勢よりて叶ふる

き事と知し清正一加勢と請ひしは清正兵士と帥めて  
 發向し忽ち一揆等と悉く攻落し即ち平城とす清正此  
 夏と以て行長と取らめり

朝鮮申磁出陣の後ハ都の人々日く小捷軍の注進と待居  
 たる小龜笠と著たる者三人早馬して崇仁門に馳入け  
 る城内の人争て軍前の消息と尋ね答ふるハ我ハ巡  
 邊使申磁の軍官の奴僕たるの昨日巡邊使忠州にて歿死  
 せし諸軍大崩れは成りぬ俺等身と脱して暮を歸て家  
 人よりれと知らせ兵禍と避させむと欲するものと云ふ辭  
 く者大に驚くこの者共過る所相告て治し傳しりて時

と移さば滿城は其の法警きわつて大に震ひ懼る初昏に  
 宰執と叫て出て避らばい度と議る大臣どもも事勢がく  
 のおしく車駕を暫く平壤に止し援ひの兵を服初に請え  
 け收復を圖むと申し掌令府司憲府の官人云四品たり司憲  
 八抑する役なり大司憲権快と云者國王の膝元は近く居  
 ようして大聲に叫て京城を固く守るべいと云ふ柳成龍云  
 權快の言甚く忠かち然れども今の度勢のつと一度立退  
 けざりて叶ふまじと云ふ斯くて評議決定しこれに大臣  
 ハ出て閭門の外に居る時は國王の旨にうして海軍國  
 子の長ハ咸鏡道に往り領府事金貴宗溱漢君尹卓然從ふ

一 順和君王子のハ江原道に往り一 長溪君黃廷或護軍兼  
 赫同知李墜從一 右相右議政ハ京城の留守と領相議  
 政宰臣數十人と扈從と定む内醫趙英璣政院吏申德麟等  
 十餘人京都を棄つるべと大に呼るるに俄に李鎰  
 が注進状至り此とき宮中の衛士も盡く散るるに成龍  
 更漏も鳴り火炬と得て状を數きこれと讀む其文に云  
 敵今明日ハ當に都城に攻入づき由かた良久して國王  
 の駕出るふ三廳御管廳總戎廳守衛廳に訓練都監禁衛營  
 此禁軍共奔て竄るるに成龍の中互に相接觸し適く  
 羽林衛の武官池貴壽の跡を過る成龍これと認て責

月羊正長台(一) 卷之三

て扈從せしむ貴壽の敢てかきと盡さむれやと并は其類二人を呼て至る景福宮の前を過る時市街の両邊は哭き聲聞えり敷義門と出て沙峴に到るは東方白いてほのくと明くるの後ろと回し視れむ城中南大門の内なる大倉より火起り煙焰已は空に騰る沙峴と踰る石橋に至り雨降り来りぬ京畿の監司權微追ひ来りて扈從は碧蹄驛に至り雨甚だしく一行て皆沾りりぬ國も驛に入り少頃あつて即て出らる衆官此より還りて都城へ入る者多し侍從臺諫司諫相廷及外方監兵使守令に至りて請ふもだんくんと下りて至らる者多し等々の罪

患陰嶺を過るに雨注ぐぐく宮人ハ足弱き馬は少物と以て面を蒙り号哭し行く陸津に至りてやせと雨止まらば船りて陸津を渡るふ己は昏れ向りて物の色を弁つて臨津の南の山の麓よりる丞廳後所あり日本勢共この木林を取て椽筏を作りて以て濟らし事を恐れられと焚くむ火光江北追照らしは是より路を求め行事を得たり初更に東坡驛に到る坡州の牧使許晉長湍の府使具孝淵等ら得て都より使者の馳走のさめ此處に在り略國王の膳部と諒けしは扈從の面々終日飢寒来り厨の中を乱れ入り辛く小奪ひ食しを將に國王の膳部も

開城府は許音具孝深も懼りて逃去ぬ。五月朔一  
日開城府は發向せんと欲し、京都より黄海の監司趙仁得  
のちとく逃散る。扈衛の人なり。適く黄海の監司趙仁得  
校道黄れ兵を率ゐて豫入て接んとし、先づ瑞奥の府使  
南嶽到著せし軍士數百人馬五六十匹有る。此れを  
以て始めて發駕とやらぬ。已に出立し、陰むで司鑰の官  
庫藏等鍵、崔彦俊出て宮中の人。昨日食せ、今日も又未だ  
食せ、米を得て飢を凌ぎて行く。南嶽の  
軍人の持する所の兵糧雜穀二三斗と、索めぬ。午時は招賢  
站に至り、趙仁得来て、路中、帳幕を設け、以て國王と

迎ふ百官始て食を得たり。此夕ハ開城府は泊る。五月二日  
咸鏡道兵使申碯もこゝみ来る。日本勢未だ京城に至らぬ  
由聞えし。ば人々都と立退れし。ば失計なりと云ふこ  
れ。因て承旨申碯として京城に入ると、敵軍の形勢を察  
せしむ

加藤清正渡漢江兵小西行長入京城之事

日本去程は加藤清正ハ都城を心ぎ、押行處は先奉、打  
く。加藤清兵衛左林、牟人、大將清正一使者を以て其  
幅之町餘も有し、と覚ゆる。大河ある。小舟一艘もなく  
渡さず、きやうなりと云ひ、越し、清正自身河邊は行向



ふと云つても其日夕陽に及びのバ是れ川邊に宿陣の朝鮮勢ハ漢江と守りて有るるが清正王城と心措一諸邑と掠りて押来る其勢は恰も風雨の發るる如く柳鯨勢ハ清正の進發ハ威風は氣と奪これ敢て一戦も及ぶハ臨津よりて落行くる清正ハ是とも知らず翌日河邊に出で望み見る小川向ひハ船も多く懸置する陸ハ敵大勢備へと立て居るが木の陰ハ白き旗川原を翻つては士卒これを見て船まで渡らんと欲せども一艘も求め得ず馬も越さずこれども白浪岬を侵して冷よりく見えぬハ諸勢あきれて居たりしや然れど

も清正ハ些とも屈せざ良久く詠め居たりし川上よ水鳥四五羽浮く連りて向ひの岬と如何にも悠々と静う小流下りてくハ清正もらと眼を付て敵軍向ひの岬は備へなば水鳥何れも悠々と流し遊びや察する処あの兵士と見ゆる物ハこの様も作し物も有るるむいて水練の達者遊渡りて見ると有るくハ曾根孫六言ふ川へ飛入たりとこれを見て究竟の若者共我ららと川へさんぶくと飛入りて遊ぎ渡り向ひの岬に懸置したる船に取乘徳軍やらしくや川を渡りて敵の軍勢と見えぬハ首葉松と木ねりする物具せしや矢槍力の

こと物とり取持せり置き旗と見らたるハ白  
紙と迷合セ樹間より置たるる清正の明察皆感  
小西行長ハ王城の一番衆と心懸け都と指て押行  
州の江邊に寄ると云つても向ひの岨ハ敵勢  
揃一て待つけ其上此川底深く流の早き事矢  
くたれバ行長も案ど煩ひ居たり江邊の北岸  
居たり相鮮勢悉く引取北岸の防禦解く  
と江東道の監司より呼ひ寄せし是に於て行長  
して民屋を打倒し竹木を切取東に作諸軍  
と渡りたる中程あて估ひし繩着切離ハ覆るも有

とくれやもたんとく徳軍濟りたる北岸守り  
兵一人もなれバ馬蹄を早め王城さして馳せ  
五月三日辰の刻一夜五月京城の東大門二日早味に著陣  
藪一城隙のやうと窺ふ兵卒悉く落失て人あ  
見之びされと関門と鎖石壁高く門心高くバ  
るもやうも見らざる処は寺木七四郎と云つ  
出で門の脇から水門より入つて見むと云ふ  
皆人此義は同じと云ふ方五尺厚の水門に鐵  
て子と組入りしは更に入らざるやう無  
水門五つ有、水の落口は鉄と以て人の通  
西洋正長拾遺記 卷之三